

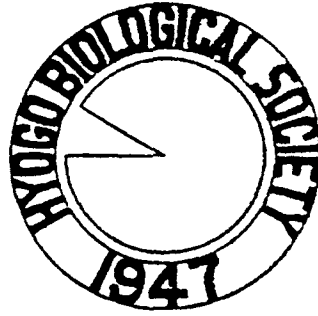
シンボルマーク

当 津 隆

30周年の記念事業の企画が進むなかで、学会のシンボルマークが話題にのぼってきた。選定委員長となった私は民主的運営の伝統を尊重して、応募規定を決めて募り、氏名を伏しての審議の結果、理事会の推した作品は、何と私の応募したデザインであった。50周年を迎えたいま、

あらためて、制作者である私の思い出を記しておく。

由緒ある博物学会を礎に再出発した歴史を表現するために、1947を必須条件と考えた。自然に親しみ、草木を愛し、小さな



虫のいのちをいつくしむ人たちの集まりを刻み込みたい。豪壮な岩礁に変化を極める日本海、荒潮の太平洋の太平洋に連なる瀬戸の内海、この二つの海を吹き抜けていく風とともに旅をする但馬をめぐる雪の山々、水清らかな音水溪谷、沃野播州からひろがる内陸地帯、東にのびる六甲山系、野趣豊かな丹波路、南国情緒にみちた淡路島、沼島などをめぐりながら、シンボルになる決めてのないまま締め切りの前夜を迎えた。結局、いまのマークに落ちついた。30周年に因んで30度の開度にした。節ぶしに広げていく考えもあったが、制定の年を示すことにして踏襲している。開き具合は蛙のイメージとダブらせていただきたい。また、割れ目を上にするとう植物の双葉、下に向けると動物の後ろ姿と見るユーモアを感じとっていただければ幸いである。

総会や研究会はいうまでもなく、理事会などの役員会にも手製の旗を飾ってきたが、いまはどうなっているのだろうか。感謝状や表彰状にもお馴染みのマークとして伝え続けてほしいと願っている。

(第七代会長)

学生が頂上をきわめ下山するのに出会う。昼前から雨が降り始め風も出て来る。やむなく途中の山小屋で休憩。雨風が強くなり、先生はここで待つことにし、私一人で頂上を目指す。頂上でリシカニツリなどを採集。先生のため這松をとる。後から来た学生に雨の中で証拠の記念写真を撮ってもらう。

採集許可証は、川崎先生の教え子が林務局に勤めていたので貰えたものである。今となっては礼文、利尻での採集は不可能である。当時採集したレブンアツモリ、レブンソウなどは全て虫害を受け無くなったが、僅かイネ科植物だけが残っている。惜しいことしたものである。

1968年には佐々木誠太郎氏のお世話で、岩手県平館の彼の奥さんの実家に泊まり、岩木山へ登った。このとき私達のほかに先生のお弟子さんともいうべき女性たち五人も同行し大変賑やかな登山行であった。このときの想いでは、頂上から降りるとき道を迷い雪渓を降りたことである。滑るのでそろそろ進むが、どうしても先生は遅れがち。若いものたちで先生のリュックを持つ。しかし最後は先生が雪渓の上に腰をおろし、滑るように下る。これでは冷えてしまうので心配するが、先生は笑いながら「この方が転ばなくてよい」と。冷たい雪渓を進むこと2時間あまり。その夜はさすがの先生もこたえたようで熱めの風呂に入り早々にやすまれた。

このように、あちこちの登山で、先生からいろいろ教えて頂き、またお宅にもお邪魔したものである。這松仙人を自称された先生は、仙人になりきるためと種子から育てた這松の盆栽を栽培、また這松の色紙に書かれていた。色紙は一千枚を目標に、書かれるたびに番号を書きこみ、来られた方々に差し上げていた。色紙は這松だけでなく酒器、花と多種多様であり、これらの全てに俳句や和歌、軽妙な語句が書き込まれていた。こうした色紙も多数頂き、四季折々に額に入れ先生を偲んでいる。

「最後は白馬山頂にたち、ピッケルをかざし落雷に打たれ成仏するのだ。俺の最後はお前も一緒に来て立ち合え。」とよく言われた。私は「わかりました。」と答えていたものだ。それが念願を果たせず早く亡くなられたことは、先生にとっては心残りだったのではと思っている。その当時の名刺に次のような文言が書かれていた。「川崎正悦 1984年8月好日91才にて白馬山頂に於いて雷死を念願 戒名 親草院愛酒恋山居士」

先生は「変わっているのは俺でなく、ほかのものが変わっているのだ。」と言われたことがある。私もそう思っている。そのような人間は私だけでなく、私の周りには何人かいる。軽妙であり、洒脱な先生であるが、個性の強い方であった。それだけにいつまでも人の心に残るのだろう。(Oct.1996.)